

エルネスト・アンセルメの音楽美学  
——著作と思想、その諸問題について——

L'esthétique musical d'Ernest Ansermet :  
ses écrits, pensée, et les problèmes

船木 理悠

Rieux Funaki

要旨

エルネスト・アンセルメの大著『人間の意識における音楽の諸基礎』は、音楽美学研究において一定の認知を得ているものの、いまだ大きく取り上げられることは少ない。しかし、20世紀の演奏史におけるアンセルメの存在の大きさを考えるなら、その思想がどのようなものであったかということはより広く知られるべきであり、また、その思想がどのような問題を含んでいたのかという点も更に問われねばなるまい。

そこで、本稿では、アンセルメの思想を概観し、そこに含まれている諸々の主題を確認することで、今後のアンセルメ思想研究に対して一つの基盤を形成することを試みる。そのため、まず、第一章でアンセルメの生涯の中で彼の思想形成と関わりの深いと思われる出来事をたどり、『諸基礎』の各版と関連する諸文献を確認する。続いて、第二章では、諸基礎全体の構成を示し、そこで論じられている内容を概観する。最後に、第三章で、『諸基礎』の議論の中で問題となるであろうと考えられる幾つかの点を指摘する。

はじめに

エルネスト・アンセルメ (Ernest Ansermet, 1883 - 1969) はスイス・ロマンド管弦楽団の指揮者として著名である一方で、大著『人間の意識における音楽の諸基礎』 (*Les fondements de la musique dans la conscience humaine*, 1961/1987, Neuchâtel : Baconnière 以下『諸基礎』) という著作において、現象学や数学を用いた音楽美学的な思索を展開したことで知られている。この著作については、アンセルメと近い関係にあった哲学者のジャン＝クロード・ピゲ (Jean-Claude Piguet, 1924 - ) が二冊の本によって紹介した他、エリック・エムリー (Eric Emery) やレイモン・クール (Raymond Court) も大きく取り上げ、イタリアの音楽学者エンリコ・フビーニ (Enrico Fubini, 1935 - ) が『音楽美学の歴史』 (*A History of Music Aesthetics*, 1991) で言及する等<sup>1</sup>、音楽美学の文脈の中で一定の評価を受けており、この著作によって、アンセルメは、単なる演奏者としてだけでなく、思想家としての地位をも確立したと言える。

<sup>1</sup> Cf., Enrico Fubini, trans. by Michael Hatwell, *A History of Music Aesthetics*, Hampshire & London, 1991, p. 474 - 476.

しかし、アンセルメの思想は上記のピゲ、エムリー、クールその他には、大きく取り上げられることは少ない。本邦においても、2017年に本稿著者が発表した論文<sup>2</sup>以外には、学術的な論文において取り上げられたことは管見の限りこれまでになく、紹介や批評といった形で取り上げられるのみであった。しかし、20世紀の演奏史におけるアンセルメの存在の大きさを考えるなら、その思想がどのようなものであったかということはより広く知られるべきであろうし、また、その思想がどのような問題を含んでいたのかという点も更に問われねばなるまい。

そこで、本稿では、アンセルメの思想を概観し、そこに含まれている諸々の主題を確認することで、今後のアンセルメ思想研究に対して一つの基盤を形成することを試みる。そのため、本稿ではまず、第一章でアンセルメの生涯の中で彼の思想形成と関わりの深いと思われる出来事をたどり、『諸基礎』の各版及び関連する諸文献を確認する。続いて、第二章では、諸基礎全体の構成を示し、そこで論じられている内容を概観する。最後に、第三章で、『諸基礎』の議論の中で問題となるであろうと考えられる点を、本稿著者の観点から指摘する。

## 第一章 アンセルメの生涯と諸著作

### 第一節 アンセルメの生涯とその思想

本節では、『諸基礎』と関連する出来事に焦点をしばりながら、アンセルメの生涯をたどる。これは、『諸基礎』の成立の背景を大まかに示しておくためである。なお、本稿では主に以下の資料を参照した。

- ・ Jean-Jacques Rapin, « Chronologie », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, pp. 77 - 86.
- ・ Jean-Claude Piguet, *La pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983.
- ・ ———, « A propos des *Fondements de la musique* et de la démarche philosophique d'Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, pp. 263 - 272.

これらの記述によれば、アンセルメは1883年11月11日にヴォー州 (Vaud) のヴヴェイ (Vevey) で生まれ、子供時代からピアノなどの楽器をたしなんでいた。1903年には、ローザンヌ大学 (l'université de Lausanne) で科学と数学の学士号を取得するが、大学での勉強のかたわら、和声学の講義を受けるためローザンヌの音楽院でアレクサンドル・デ

<sup>2</sup> 拙論「エルネスト・アンセルメの音楽美学における解釈と身体——現象学的身体論としてのアンセルメの音楽美学——」『音楽学』第63巻1号、2017年、pp. 18・31。

ネレア (Alexandre Dénéréaz) の講義を受けていた<sup>3</sup>。その後、エコール・ノルマル・ド・ローザンヌで数学の教鞭をとる。また、1904年には、コレージュ・クラシック・カントナル・ド・ローザンヌでも数学を教えている。

1905年にはパリに赴き、ソルボンヌで数学の講義を聞くのと同時に、コンセルヴァトワールでは対位法と音楽史の講義を受けるが、この時に数学と音楽の両立が不可能であると思ったり、準備していた数学の学位論文を断念している。

1906年には祖国スイスに帰り、再びコレージュ・クラシック・カントナル・ド・ローザンヌで教鞭をとる。

このように、アンセルメは当初かなり熱心に数学者としての道を歩んでいた。このことは、ランゲンドルフが、アンセルメはアンリ・ポワンカレの著作を読んで、ソルボンヌに聴講に行ったと述べていることからもうかがい知ることができる<sup>4</sup>。この数学や科学についての関心は後年も衰えず、ランゲンドルフによれば、アンセルメの書斎にはルコント・デュ・ニュー [Lecomte du Nouÿ]、ロスタンド [Rostand]、アインシュタイン、オッペンハイマー等の著作が並んでいたという<sup>5</sup>。この数学者としてのキャリアは『諸基礎』における数学を用いた議論を彼に可能としたと言える。

ただし、ピゲによれば、アンセルメは、「現実から完全に分離されたものとしてかんがえられた、「現代数学」と今日呼ばれているもの（これはブルバキ学派である）」<sup>6</sup>を拒否し、「彼[アンセルメ]は、従って現実と「密着する」数学を夢見ていた」<sup>7</sup>。このような姿勢は、まさに『諸基礎』において音楽と密着したものとして数学を用いている点とつながっていると見えるだろう。

また、この1906年にはもう一つ大きな意味を持つ出来事があった。シャルル＝フェルディナンド・ラミュ (Charles-Ferdinand Ramuz, 1878 - 1947) との出会いである。ラミュは今日スイスを代表するとされている作家であり、《狐》や《結婚》、《兵士の物語》などでストラヴィンスキーに協力するようになる人物である。この出会いから、後にアンセルメは、ラミュが中心人物となっていた『カイエ・ヴォードワ』 (*Cahiers Vaudois*, 1914 - 1920) のサークルと接点を持つことになるのである。

---

<sup>3</sup> Cf., Ansermet et Piguet, *Entretiens sur la musique*, Lausanne, pp. 26 - 27. 邦訳、クロード・ピゲ (遠山一行、寺田由美子[訳]) 『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年、p. 19 - 20、参照。なお、デレネアはジゼル・ブルレの『音楽的時間』 (*Le temps musical*, Paris, 1949) やエリック・エムリーの『時間と音楽』 (*Temps et musique*, Lausanne, 1975) などでも言及されており、フランス語圏の音楽美学に一定の影響を与えたことが見て取れる。従って、ここでアンセルメがデレネアの教えを受けていたという事実は、フランス語圏の音楽美学全体の見取り図を捉える上で注目しておいてよい。

<sup>4</sup> Cf., Jean-Jacques Langendorf, « Pourquoi une approche phénoménologique de la musique par Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 273.

<sup>5</sup> Cf., *ibid.*, p. 274.

<sup>6</sup> Piguet, *Pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983, p. 11. なお、ブルバキ学派 (l'Ecole de Bourbaki) というのは、ニコラ・ブルバキ (Nicolas Bourbaki) というペンネームで1930年代から活動していたフランスの数学者グループである。

<sup>7</sup> *Ibid.*

そして、1911年5月15日には初めてのコンサートを指揮し<sup>8</sup>、1912年にはストラヴィンスキーと出会い<sup>9</sup>、1914年には『カイエ・ヴォードワ』が刊行される。

次に、アンセルメにとっての大きな出来事は現象学との出会いである。当時の哲学的状況はアンセルメの期待に応えることができなかったが、1943年にサルトルの『存在と無』が出版され、アンセルメにとってはこれが頼みの綱となったのである。「この現象学の諸々のテーゼこそが、アンセルメに、1940年以前に彼に示された諸問題を解くのではないにしても、1945年になってからは、少なくとも輪郭をはっきりさせることを許した」<sup>10</sup>のだ。『諸基礎』にもサルトルの名前とその用語は頻出することから判るように、アンセルメにとってサルトルの思想の存在は非常に大きく、実際、アンセルメは最初期から *Les temps modernes* を購読し<sup>11</sup>、「アンセルメは、サルトルを1946年の5月7日に訪問した」<sup>12</sup>ほどである（ただし、ピゲによれば、この時サルトルと会うことは叶わなかったという）。また、このことはアンセルメの現象学は純粋なフッサール現象学というよりも、「サルトルを経由した現象学」であることを意味している。

その後、長い執筆期間を経て、1961年に『人間の意識における音楽の諸基礎』が刊行される。この諸基礎を巡っては、次節で詳説することにし、ここでは省略する。

1969年に2月20日、アンセルメは86歳で没した。

このように、アンセルメの思想的背景としては、数学者としての勉強、『カイエ・ヴォードワ』のサークルとの交流、現象学との出会いが指摘されている。

## 第二節 アンセルメの著作

本節では、アンセルメの著作の出版状況を示す。後述するようにアンセルメの著作の幾つかのものは、複数の形で出版されている。現時点でその全ての状況を確認することは出来ていないが、本稿著者によって確認が取れた範囲でここに示し、アンセルメ研究の基礎的な整理を行うのが本節の目的である。

### 第二節 - (1) 『諸基礎』の四つの版とその成立過程

『諸基礎』は現在四つの形で読むことができる。第一は1969年の初版であり、第二はドイツ語版、第三は遺稿を基に死後出版された新版、そしてこの新版を再録した『著作集』版である<sup>13</sup>。以下、各版とその成立について簡単に紹介する。

<sup>8</sup> ピゲとの対話では1910年と言っている。『アンセルメとの対話』p. 127、参照。

<sup>9</sup> 『アンセルメとの対話』みすず書房、p. 100 参照。しかしラパンは1913年としている。Cf. J.-J. Rapin, « Chronologie », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 78.

<sup>10</sup> Piguet, *Pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983, p. 18.

<sup>11</sup> Cf., Jean-Jacques Langendorf, “

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 17.

<sup>13</sup> なお、ランゲンドルフの *Ernest Ansermet ou la passion de l'authenticité* (Genève, 1997) によればイタリア語版(1996年)も出版されているとのことであるが、詳細が確認できなかったので、本稿では取り

・初版 (1961年)

アンセルメの主著である『諸基礎』の構想は、ピゲによれば1943年にまで遡る<sup>14</sup>。そして、その後の執筆の進み具合についても、ピゲは『著作集』版に付された文章においてかなり詳しく記している<sup>15</sup>。以下、ピゲの記述に基づいてアンセルメの執筆の過程を追っておく。

1948 - 1951年にかけて：音楽的情動と調的な感情について500ページばかりを執筆。

1952年：既に書かれたものを校正したり書き直したりすることに費やされる。

1953年：「音楽とは何か」を基盤となるテーマとして捉えることや、また、リズム的エネルギーについて考慮を加えることで、全てを作り直す。

1954年：およそ500ページにわたりエネルギー及びリズム構造についての諸知見を展開し、このことにより「ストラヴィンスキーについての注」を三度書き直す。

1955 - 1957年：「音楽の知覚的基礎付け」に専心する。「傍注」(notes marginales)に関係する最初のテキスト(「存在とエネルギーについての注」、「協和についての注」)を書く。著述の中に「知覚的ログリズム」(les logarithmes perceptifs)が初めて現れる。

1957年：『諸基礎』の決定的な形が垣間見られる。聴覚的知覚は、著作の第一部の中心に置かれる。

1959年 - ：諸音における音楽の顕現に専念。「神の現象学」を二度書き、そして十回訂正している。

1960年：4月に入ってからすぐ、音楽的諸構造の構成と意味作用についてが、続いて、旋律の進み方の自由さや音楽的な多様な諸企投についてが書かれる。秋には、音楽の創造という問題を経験的な諸々の観点から執筆。

1961年：現代音楽に割かれた章に専念。同時に、「現象学「対」科学」(Phénoménologie « versus » Science)という「注」を書き直し、「ストラヴィンスキーへの注」を部分的に訂正して作り直す。6月2日、ハンブルクにおいて、最後のページの下に、「完」(fin)と書き入れる。その後、印刷完了日である10月15日までの間、全タイトルとサブ・タイトル、図版の確認、校正刷りへの訂正作業が行われた。

このように、『諸基礎』はかなり長い期間にわたって推敲を繰り返されて成立した著作である。

加えて、『諸基礎』の出版には更にピゲの意見も加わっている。すなわち、ピゲは意見を

---

上げない。

<sup>14</sup> Cf., Pigué, « A propos des *Fondements de la musique* et de la démarche philosophique d'Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 263.

<sup>15</sup> Cf., *ibid.*, pp. 263 - 264.

求めてきたアンセルメに対して、「種々のタイトルやサブ・タイトルを使えば、息継ぎができて、テキストが読みやすくなるだろうと考え」<sup>16</sup>、アンセルメに提案した。ピゲによれば、アンセルメは熟慮の上、ほぼ修正することなくピゲの提案を受け入れたとのことである<sup>17</sup>。

次にこの初版の形態について述べると、この版のみ二巻本となっており、第一巻は「序言」(Avant-propos, pp. 7 - 8) に続いて、「序論」(Introduction, pp. 9 - 22)、第一部 (pp. 23 - 365)、第二部 (pp. 367 - 582) そして「結論」(pp. 583 - 606)、目次 (pp. 607 - 609) からなり、第二巻は、本論への注 (pp. 7 - 287) と目次 (pp. 289 - 291) からなっている。

### ・ドイツ語版 (1965)

フランス語による初版の出版後、アンセルメはドイツ語版のための改訂作業に着手し、これは *Die Grundlagen der Musik im menschlichen Bewußtsein* というタイトルで、1965年にミュンヘンの R. Piper & Co Verlag から出版された。

この版には、アンセルメによる「ドイツ語版への前書」(Vorbemerkung zur deutschen Ausgabe, S. 5) が付されており、ロベール・ゴデ (Robert Godet) とウィリー・シュミット (Willy Schmid) への献辞、目次 (S. 7 - 10)、「序言」(Vorwort, S. 11 - 23)、に続いて、「序論」(Einleitung, S. 25 - 39)、第一部 (S. 41 - 348)、第二部 (S. 349 - 627)、「補遺」(Anhang, S. 629 - 847) となっている。初版との構成上の差異を述べるなら、「ドイツ語版への前書」と献辞、「序言」は他の版には見られないものである(ただし、後述するように、「序言」のみは『音楽論集』にフランス語の原テキストが収録されている)。また、「補遺」の内、「I. 注」(I. Randbemerkungen, S. 631 - 672)、「II. 協和の観念」(II. Der Begriff der Konsonanz, S. 673 - 771)、「III. 反省の構造」(III. Die Strukturen der Reflexion, S. 772 - 831) は初版と共通しているが、初版に見られる「IV. ストラヴィンスキーについての注」(IV. Note sur Strawinsky, pp. 265 - 287) はドイツ語版では削除されている。加えて、「人名-作品名索引」(Personen- und Werkregister, S. 835 - 840) と「事項索引」(Sachregister, S. 841 - 847) も付されている。

### ・新版 (1987)

ピゲによれば、ドイツ語版の出版は、アンセルメにとって自らの著作全体を見直すよい機会であった。そして、これによりアンセルメは、初版の記述が自身の最終的な思惟の到達点と完全には一致していなくなっていると考えようになった。

結局のところ、新たな版はアンセルメの生前には出版されなかったが、ピゲ等の尽力により、1987年に初版と同じバコニエール社から出版された。初版とは章のタイトルやサブ・タイトルの付け方が異なっており、部分的に説明を削除して簡素化したり、箇所によって

<sup>16</sup> 『アンセルメとの対話』、p. 129。

<sup>17</sup> 同上、p. 130、参照。Cf., Piguet, « A propos des *Fondements de la musique* et de la démarche philosophique d'Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 264.

は書き足しを行ったりしてあるが、全体の大きな構成は同じである。

また、初版との違いとして、ピゲによる「第二版の前書」(Préface de la seconde édition, pp. 7 - 12)、クロプフェンシュタイン(Laurent Klopfenstein)による短い解説(pp. 12 - 15)、アンセルメのオリジナル原稿に基づいて初版から新版への変更箇所を一覧にした「考証資料」(Apparat critique, pp. 17 - 22)、「人名索引」(Index des noms, pp. 803 - 808)、「事項索引」(Index des matières, pp. 809 - 816)が加えられている。

#### ・『著作集』版(1989)

最後に、上記の「新版」は、『人間の意識における音楽の諸基礎と他の諸著作』(*Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989)に収録されたものとしても読むことができる。

この本を本稿では『著作集』と呼ぶことにするが、この『著作集』には、『諸基礎』の他に、アンセルメによる個別の作曲家についての文章や音楽についての著作や書簡を集めた「エルネスト・アンセルメとその諸著作」(Ernest Ansermet et ses écrits, pp. 87 - 260)がアンセルメ自身の文章として含まれている。

また、『著作集』には加えて以下のものも含まれている。すなわち、ジャン・ジャック・ラパンによる『著作集』全体への「緒言」(Avertissement, pp. I - II)、ジャン・スタロビンスキーによる「前書」(Préface, pp. III - XIV)、アン・アンセルメとラパンによる「音楽の人生」(Une vie de musique, pp. 1 - 86)、「ディスコグラフィ」(Discographie, pp. 1085 - 1102)、「文献一覧」(Bibliographie, pp. 103 - 1104)、「付録」(Annexes)として『著作集』全体の「人名索引」(Indes des noms, pp. 1105 - 1109)と「事項索引」(Index des matières, pp. 1109 - 1112)、そして、最後に「目次」(Table des matières, pp. 1113 - 1119)である。

また、『著作集』版の『諸基礎』には、「この版への前書」(Préfaces de la présente édition, pp. 263 - 289)として、以下の三つの文章が付されている。

- ・ Jean-Claude Piguet, « A propos des *Fondements de la musique* et de la démarche philosophique d'Ernest Ansermet », pp. 263 - 272.
- ・ Jean-Jacques Langendorf, « Pourquoi une approche phénoménologique de la musique par Ernest Ansermet », pp. 273 - 281.<sup>18</sup>
- ・ Laurent Klopfenstein, « Pourquoi une approche mathématique de la musique par Ernest Ansermet », pp. 283 - 289.

加えて、巻末の「付録」の一つとして、「諸基礎用語一覧」(Lexiques de fondements, pp. 1067 - 1083)も付されている。

---

<sup>18</sup> このランゲンドルフの文章については、Jean-Jacques Langendorf, *Euterpe et Athéna : 5 essais sur Ernest Ansermet*, Chêne-Bourg/Genève, 1998, pp. 123 - 139 にも収録されている。

## 第二節 - (2) 『音楽論集』

### i) 『音楽論集』の構成

アンセルメは『諸基礎』以外にも、多様な媒体で多くの音楽論を書いており、それらの内幾つかはアンセルメの死後ピゲによってまとめられ、1971年に『音楽論集』(*Écrits sur la musique*, Lausanne, 1971)として出版されている。

この『音楽論集』には、ピゲによる短い「前書」(p. 7)に続いて、以下のような構成となっている。

- I. 「回想」(*Souvenirs*, pp. 9 - 30)
- II. 「音楽論集」(*Ecrits sur la musique*, pp. 31 - 168)
- III. 「音楽と言葉」(*Musique et langage*, pp. 169 - 263)
- IV. 「最後のメッセージ」(*Dernier message*, pp. 237 - 244)

そして、これらの最後に、ピゲによる「書誌上の注解と概要」(*Note et Notices Bibliographiques*, pp. 245 - 251)、「目次」が続く。これらの内、「音楽論集」と「音楽と言葉」は、アンセルメが様々な媒体に寄稿した幾つかの文章を集めたものであり、それぞれ以下の文章が収録されている。

#### 「音楽論集」

1. 「オーケストラの指揮者の身振り」(*Le geste du chef d'orchestre*, pp. 33 - 37)
2. 「音楽体験と今日の世界」<sup>19</sup>  
(*l'expérience musicale et le monde d'aujourd'hui*, pp. 39 - 69)
3. 「音楽とその演奏」(*La musique et son exécution*, pp. 71 - 75)
4. 「音楽と音楽の意味」(*La musique et le sens de la musique*, pp. 77 - 88)
5. 「音楽の諸問題」(*Les problèmes de la musique*, pp. 89 - 112)
6. 「芸術作品の条件」(*La condition de l'œuvre d'art*, pp. 113 - 134)
7. 「リズムの諸構造」(*Les structures du rythme*, pp. 135 - 149)
8. 「音楽生活の現実」(*Les réalités de la vie musicale*, pp. 151 - 158)
9. 「音楽的時間」(*Le temps musical*, pp. 159 - 168)

#### 「音楽と言葉」

1. 「黒人のオーケストラについて」(*Sur un orchestre nègres*, pp. 171 - 178)
2. 「ロシア音楽」(*La musique russe*, pp. 179 - 195)

---

<sup>19</sup> 「音楽経験」としてもよいが、吉田秀和が「現代音楽の諸問題」で「音楽体験と今日の世界」としているのに従った(吉田秀和、「現代音楽の諸問題」、『主題と変奏』創元社、1953年、p. 163、参照)。



3. 「ドビュッシーの言語」 (Le langage de Debussy, pp. 197 - 209)
4. 「ストラヴィンスキーの場合」 (The Stravinsky Case, pp. 211 - 225)
5. 「ラミュの肖像」 (Portrait de Ramuz, pp. 229 - 236)

このように、「音楽論集」の部分では、原理的／一般的な問題についての文章がまとめられており、「音楽と言葉」においては、より個別的な議論がなされている。また、次の「出典等について」を見ると判るが、これらは発表年の順番に並べられている。

なお、これらの文章の内「音楽論集」に含まれている「オーケストラの指揮者の身振り」、「音楽体験と今日の世界」、「音楽と音楽の意味」、「芸術作品の条件」、「リズムの諸構造」、そして、「音楽と言葉」に含まれる「ロシア音楽」、「ドビュッシーの言語」は『著作集』にも再録されている。

## ii) 『音楽論集』収録の文章の出典等について

続いて、これらの文章の初出等について、ピゲの注記を基に若干の捕捉と共に記しておく。

まず、I. 「回想」は、「アンセルメ、アンセルメを語る」 (Ansermet parle d'Ansermet) というタイトルで *Le Journal de Genève* (Série littéraire N° 1, 1970, p. 48[?]<sup>20</sup>) に掲載されたもので、1965年の9月15日にシャンベジー (Chambésy) で医師たちに向けて行われた講演によるものである<sup>21</sup>。

また、最後のIV. 「最後のメッセージ」は、「1968年12月3日に、ローザンヌでスイス・ロマンド管弦楽団の50周年の祝宴にて、アンセルメによって即興で行われた演説」<sup>22</sup>であり、*Radio-TV-Je-vois-tout* 誌 (Lausanne, 1969, N° 9, pp. 13 - 19) にタイトルなしで掲載されたものである。アンセルメが翌年1969年の2月に世を去ったことを考えるなら、まさに巨匠の死の直前の時期の言葉であったと言える。

次に、II. 「音楽論集」とIII. 「音楽と言葉」に採録された各々の文章について述べる。

- ・「音楽論集」冒頭の「オーケストラの指揮者の身振り」は『エルネスト・アンセルメとスイス・ロマンド管弦楽団』 (*Ernest Ansermet et l'orchestre de la Suisse romande*, Lausanne, 1943, ff. 17 - 29) に掲載されたものである。ここでアンセルメは、既に『諸基礎』における主要概念であるカダンスという言葉を用いて指揮者の役割について論じており (cf. EM34 [136])<sup>23</sup>、このことから、『諸基礎』につながる思索がこの時点で既に始まっていたことが読み取られる。

<sup>20</sup> ピゲの文章では「48 p.」となっている。

<sup>21</sup> Cf., Pigué, « Notices bibliographiques », dans Ansermet, *Écrits sur la musique*, Neuchâtel, 1971, pp. 249 - 250.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 251.

<sup>23</sup> *Écrits sur la musique* からの引用に際しては、EMと略記し頁を付す。また、『著作集』にも再録された箇所については[]内に頁を記す。

- ・第二の「音楽体験と今日の世界」は1948年にジュネーヴで開かれた国際会議において9月2日に講演されたものであり、会議の報告集である『現代芸術についての討論』(*Débat sur l'art contemporain*, Neuchâtel, 1949)に同じタイトルで収録されたもの(pp. 27 - 62)に基づいている。わが国では、アンセルメは「旋律はドミナントに向かう弾道である」と述べたとしばしば言われるが<sup>24</sup>、これは、この論考で「メロディーとは一つの弾道である[*La mélodie est une trajection*]」(EM40[142])とされている部分が前後の文脈と結びついたものではないかと考えられる。
- ・第三の「音楽とその演奏」は、*Revue internationale du droit d'auteur* (Paris, 1960, N° 27, pp. 55 - 71)に掲載されたものである。これは比較的短い文章であるが、ここでアンセルメは、トスカニーニやストラヴィンスキーの「演奏家は書かれたものを演奏するだけでなくではならない」(EM74)という考え方を批判しており、演奏についての指揮者アンセルメの考えをうかがうことができる。
- ・第四の「音楽と音楽の意味」は、*Revue de théologie et de philosophie* (XI, [1961], pp. 251 - 261)に掲載されたものである。ピゲによれば、これは『諸基礎』のオリジナルの前書であったが、『諸基礎』フランス語版においては掲載されることはなく、ドイツ語版の「序言」(Vorwort, S. 11 - 23)として再掲された。
- ・第五の「音楽の諸問題」は、*Gazette de Lausanne*の後援でローザンヌにおいて、1963年の1月29日行われた講演(同年2月22日にヌシャテル大学でも繰り返された)に基づき、*Revue musicale de Suisse romande* (1963, N° 1)に掲載された。
- ・第六の「芸術作品の条件」は、1965年のジュネーヴ国際会議において9月6日に講演され、『ロボット、動物そして人間』(*Le robot, la bête et l'homme*, Neuchâtel, 1966, pp. 117 - 141)に収録されたものである。
- ・第七の「リズムの諸構造」は、1965年の8月9 - 14日にジュネーヴのジャック・ダルクローズ協会(Institut Jaques-Dalcroze)によって開かれた「第二回リズムとリュトミックについての国際会議」(Deuxième Congrès International du Rythme et de la Rythmique)において、13日に行われた講演に基づいており、この会議の記録集(*Deuxième congrès international du rythme et de la rythmique*, Genève, [1966], pp. 156 - 166)<sup>25</sup>に掲載されたものである。この論考の中では、アンセルメの美学における主

<sup>24</sup> 例えば、小倉朗『現代音楽を語る』岩波新書、1970年、p. 10、20、参照。

<sup>25</sup> この報告集には発行年が記されていないが、ピゲが括弧つきで1966年としているので、それに倣った。なお、後述の「音楽的時間」の中でアンセルメはフランク・マルタンの紹介するサヴォア地方の歌(*la chanson savoyarde*)に言及するが、これはこの報告集におけるマルタンの講演(pp. 15 - 21)で紹介され

要概念であるカダンスについての言及がされている他、ジゼル・ブルレやピエール・スフチンスキーの名前を挙げながら「音楽的時間」についての言及がなされる等、「音楽論集」の最後の「音楽的時間」とも関わりの深い論考である。

- ・八番目の「音楽生活の現実」は、1967年10月20日にジュネーヴで行われた会議で講演されたもので、*L'enseignement secondaire de demain* (Aarau, 1968, pp. 89-98) に発表された。ピゲによればこれは、独訳が *Civitas* 誌 (N° 12, Lucerne, 1968, pp. 922-932) にも掲載されたとのことである。
- ・最後に九番目の「音楽的時間」は、アンセルメの死後、1970年に『ミクロメガス VI : 時間と音楽』 (*Micromégas VI : le temps et la musique*, [Zurich?], 1970, pp. 6.65-6.71) に収録されたものである。この『ミクロメガス』は、フッサールやハイデガー、バシュラル等の時間に関わる文章の抜粋と、様々な著者による書下ろしの文章からなっているが、アンセルメの「音楽的時間」はこの本のために生前に書き下ろされたものである。

続いて、「音楽と言葉」に採録された文章についてである。

- ・まず、最初の「黒人のオーケストラについて」であるが、これはジャズを扱った論文であり、*La Revue romande* (3<sup>e</sup> série, N° 10, 1919, pp. 10-13) に掲載され、後には、多くの国で翻訳されたとのことである。ピゲとの対談である『音楽についての対話』においても、この論考が言及されている<sup>26</sup>。
- ・第二の「ロシア音楽」は *Revue Pleyel* (1926, N° 38, pp. 49-53 et N° 39, pp. 87-91) に掲載されたものである。この雑誌に掲載されたものは、短い紹介文が前文として付されていたとのもので、この前文は『音楽論集』の「文献上の注記」の中に掲載されている (cf. EM251)。
- ・三番目の「ドビュッシーの言語」は1962年の科学研究国立センター (Centre national de la recherche scientifique) の国際コロキウムにおける報告に基づき、『ドビュッシーと二十世紀の音楽の発展』 (*Debussy et l'évolution de la musique au XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1965, pp. 33-45) に掲載されたものである。

---

たものである (cf. p. 19)。

<sup>26</sup> Cf., *Entretiens sur la musique*, Neuchâtel, 1963, pp. 41-42. 邦訳：クロード・ピゲ『アンセルメとの

- ・四番目の「ストラヴィンスキーの場合」は、英語で収録されているが、元々「現代音楽の危機——Ⅰ. 音楽上の問題、Ⅱ. ストラヴィンスキーの場合」として、イギリスの *Recorded Sound* 誌 (Ⅰ: 1964, No 13, pp. 165 - 175, Ⅱ: 1964, No 14, pp. 197 - 204) として掲載されているもののⅡの部分である。なお、Ⅰの部分は「音楽論集」に含まれている「音楽の諸問題」の本質的なところを繰り返したものであり、また、このⅠ、Ⅱとも仏文の原テキストは発見されていないとのことである。
- ・最後の「ラミュの肖像」は、言うまでもなくラミュについての文章であるが、これはラミュの『もし太陽が戻らなければ』 (*Si le soleil ne revenait pas*, Paris, 1968) に付された (pp. 165 - 174) 文章である。

### 第二節 - (3) 『音楽についての対話』

『音楽についての対話』 (*Entretiens sur la musique*, Neuchâtel, 1963) は、ラジオ-ジュネーヴで1961~1962年の間の冬に放送されたピゲとの対談を、速記によってまとめたものである。

この対談は大きく四つの部分に分けられており、それぞれ「第一シリーズ: 回想」 (Première série: Souvenirs)、「第二シリーズ: 現代音楽」 (Deuxième série: La musique contemporaine)、「第三シリーズ: 音楽の本質」 (Troisième série: L'essence de la musique)、「第四シリーズ: オーケストラの指揮者」 (Quatrième série: Le chef d'orchestre) と題され、各々が2~4回の対談からなっている。

本稿の主題である「アンセルメの音楽美学」という観点から最も重要なのは、言うまでもなく、「第三シリーズ: 音楽の本質」である。ここでは、『諸基礎』成立の背景や過程、音楽的対数の議論、音楽史を三期に分けるアンセルメ独特の音楽史観、神の現象学などが簡略に説明されている。この音楽的対数は、『諸基礎』全体を貫く鍵概念であり、音楽史を三期に分ける考え方は、『諸基礎』第二部の枠組みとなっているものである。

また、音楽作品とその演奏という音楽美学上の問題圏にとっては、「第四シリーズ: オーケストラの指揮者」が重要である。ここでは、スコア (テキスト) と演奏をアンセルメがどのように捉えているかということが語られる。

このスコアについての問題は「第二シリーズ: 現代音楽」においてストラヴィンスキーを取り上げた際にも語られており、こちらも参照することができる。

また、アンセルメの議論におけるもう一つの鍵概念である「カダンス」についても、「第四シリーズ」及び「第二シリーズ」で言及されている。

このように、アンセルメの思想という観点からすると、『諸基礎』の内容の要約、捕捉として読むことができる著作と言える。

---

対話』みすず書房、p. 41 - 42、参照。

## 第二節 - (4) その他の著作

上記の他に、アンセルメの単著として単独で出版されていないものが幾つかある。ここでは、本稿著者が現物を確認することができたものに限り、紹介しておく。

### i) 『現代芸術についての討論』

『音楽論集』に収録された「音楽体験と今日の世界」について述べたように、アンセルメは、1948年にジュネーヴ国際会議で講演を行い、この講演はバコニエール社から出版された記録集である『現代芸術についての討論』(*Débat sur l'art contemporain*, Neuchâtel, 1949)に収録されている。「音楽体験と今日の世界」自体は『音楽論集』や『著作集』に所収されているが、この『現代芸術についての討論』の中には、講演以外の部分でのアンセルメの発言も含まれており、それは他の媒体では管見の限り読むことはできない。

まず、この記録集固有のアンセルメに関わる部分としては、講演後の1948年9月4日に行われた討議を記録した「対話2」(*Deuxième entretien*, pp. 231 - 249)である。ここでは、当時の著名な音楽批評家であるボリス・ド・シュレゼール (*Boris de Schlœzer*, 1881 - 1969)<sup>27</sup>、音楽学者のロラン・マニユエル (*Roland-Manuel*, 1891 - 1966)、哲学者で音楽にも造詣の深かったガブリエル・マルセル (*Gabriel Marcel*, 1889 - 1973)、といった人々からの質問にアンセルメが答えている。これは、アンセルメの思索が当時どのように受け止められたのかを知るうえで貴重な記録であると言えよう。

また、「対話7」(*Septième entretien*, pp. 351 - 374)<sup>28</sup>では、アンセルメも、ハーバート・リード (*Herbert Read*, 1893 - 1968) やマルセル、ド・シュレゼールの議論を受けて、シェーンベルクやミヨーに言及しつつ発言を行っている。一方で、「対話8」(*Huitième entretien*, pp. 375 - 401)<sup>29</sup>では、議長を務め、討論の最後に記録集のページで3ページにわたる発言を行っている。これらの発言は、その場その場の文脈で行われたものであるが、アンセルメの思想を他の論者との対話の中で読み取ることができて、有益な記録である。

なお、アンセルメの講演「音楽経験と今日の世界」自体は、既に述べたように『音楽論集』や『著作集』にも所収されているが、加えて、単独の冊子としても *L'expérience musicale et le monde d'aujourd'hui* (Neuchâtel, 1948) の題でバコニエール社から出版されていることを付言しておく<sup>30</sup>。

<sup>27</sup> ロシア出身の音楽批評家、哲学者、翻訳家。『バッハ入門：音楽美学についての試論』(*Introduction à J.-S. Bach : essai d'esthétique musicale*, Paris, 1947)における音楽美学的考察や、*La Revue musicale* 誌、*La Nouvelle Revue Française* 誌等での批評、ドストエフスキーやシェストフの仏訳で知られる。また、スクリャーピンの娘と結婚し、スクリャーピンの音楽の用語に務めた。

<sup>28</sup> 9月8日に行われたシャルル・モルガン (*Charles Morgan*) の講演「作家からの独立」(*L'indépendance des écrivains*, pp. 151 - 167) についての討論。

<sup>29</sup> 9月9日に行われたマルセルの講演「芸術の刷新の条件」(*Les conditions d'une rénovation de l'art*, pp. 196 - 204) についての討論。

<sup>30</sup> なお、この冊子については京都市芸術大学の柿沼敏江先生にご教示いただき、現物を確認させていただいた。また、後述の『主題と変奏』に収録されている翻訳についても、PDF化したものをご提供くださり、これにより詳細を確認することができた。この場を借りて、御厚意に感謝を申し上げる。

## ii) 「イーゴリ・ストラヴィンスキーの作品」

既に述べたように、アンセルメは『音楽論集』に所収された1964年の文章でもストラヴィンスキーを取り上げており、1961年の『諸基礎』(及び死後に出版された新版)でもストラヴィンスキーにかなりのページを割いて言及している<sup>31</sup>。このことは、アンセルメにとってストラヴィンスキーの存在の大きさを物語っていると言えるが、*La revue musicale*に掲載されたこの「イーゴリ・ストラヴィンスキーの作品」(« L'œuvre d'Igor Stravinsky », *La revue musicale*, deuxième année, n° 9, 1921, pp. 1 - 27) は、このような一連のストラヴィンスキーへの言及の最初期のものである。

アンセルメとストラヴィンスキーの関係は改めて述べるまでもないが、多くのストラヴィンスキー作品を初演したアンセルメによるストラヴィンスキー論として、また、この時期のアンセルメのストラヴィンスキー観を知るうえで、この論文は重要なドキュメントとなる。また、先述のド・シュレゼールもストラヴィンスキーの評伝の中でこの論文に言及しており<sup>32</sup>、1920年代のフランスにおけるストラヴィンスキー受容の中で一定の認知を得ていた論文のようである。

## iii) 『作曲家たちとその諸作品』

「アンセルメはコンサートの彼の諸々のプログラムでの作品の説明に細心の注意を注いでいた」<sup>33</sup>が、これらはピゲによって『作曲家たちとその作品』(Ansermet (sous la direction de J. C. Piguet), *Les compositeurs et leurs œuvres*, Neuchâtel, 1989) として出版されたとのことであるが、本稿ではこの現物を確認できていない。しかしながら、『著作集』にその一部が収録されているので、その範囲でここに紹介しておく(なおページは『著作集』のものである)。

Ludwig van Beethoven : 《交響曲第5番》、pp. 97 - 98

Robert Schumann : 《交響曲第2番》、pp. 98 - 100

Johannes Brahms : 《交響曲第3番》、pp. 100 - 102、交響曲第4番、pp. 102 - 103

Claude Debussy : 《牧神の午後への前奏曲》、pp. 103 - 104

Albert Roussel : 《交響曲第5番》、pp. 104 - 106

<sup>31</sup> 例えば、1961年版の第二部の第二章「現代音楽」(*La musique contemporaine*, pp. 471 - 582)の「2. ストラヴィンスキー」(pp. 481 - 506)や、第二巻の「II. 意識についての注」の中の「ストラヴィンスキーの批判」(pp. 130 - 132)、「5. ストラヴィンスキーとリズム」(pp. 170 - 180)といったように見出しとしてストラヴィンスキーの名前が冠されている箇所に加え、随所でその名前を挙げている。

<sup>32</sup> Cf. Schloëzer, *Igor Stravinsky*, Rennes, 2012, p. 64. 「ストラヴィンスキーを扱ったシュレゼールの著作は、*NRF*と*La Revue musicale*で1922年に発行された諸々の記事を基にして編集されたものであり、「[春の]祭典」の作曲家についての最初のフランス語でのモノグラフィーである」(Christine Esclapez, « Introduction », dans, Boris de Schloëzer, *Igor Stravinsky*, p. 14.)であり、1929年に出版された。本稿では2012年のPUR版を参照した。

<sup>33</sup> Jean-Jacques Rapin (?), « Avant-propos de « Analyses d'œuvre musicales » », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine, et autres écrits*, Paris, 1989, p. 97.

- Béla Bartók : 《弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽》、pp. 106 - 106、  
《オーケストラのための協奏曲》、pp. 109 - 111
- Igor Stravinski : 《ペトリュシカ》、pp. 112 - 116、《春の祭典》、pp. 116 - 118、  
《プルチネルラ》、pp. 118 - 120、《管楽器のための交響曲》、pp. 120 - 121、  
《結婚》、pp. 121 - 122、  
《混声合唱と二つの管楽五重奏のためのミサ》 pp. 123 - 124
- Alban Berg : 《管弦楽のための三つの小品》、p. 124 - 125
- Bohuslav Martinů : 《交響曲第5番》、p. 126 - 127
- Serge Prokofiev : 《交響曲第6番》、pp. 128 - 130
- Arthur Honegger : 《管弦楽のための交響曲》、pp. 130 - 130  
《交響曲第5番 三つのレ》、pp. 133 - 134

## 第二節 - (5) 書簡

アンセルメの書簡は、『著作集』の文献表によれば、以下のものが出版されているとのことだが、本稿では現物の詳細が確認できていない。

- *Correspondance : Ernest Ansermet, Frank Martin, 1934-1968* (éd. Jean-Claude Piguët), Neuchâtel, 1976.
- *Lettres de compositeurs genevois à Ernest Ansermet : 1908-1966* (rassemblées par Claude Tappolet), Genève, 1981.
- *Correspondance Ernest Ansermet, R. Aloys Mooser : 1915 - 1969* (éd. établie par Claude Tappolet), Genève, 1983.
- *Lettres de compositeurs français à Ernest Ansermet* (éd. établie par Claude Tappolet), Genève, 1988.

また、『著作集』にも幾つかの書簡が収録されている。これらの中で特に著名な相手としては、プーランク、ストラヴィンスキー、ラミュ、オネゲル、ブリテン、マルタン、フルトヴェングラー、ピゲが含まれている。

更にピゲとの書簡集 (*Correspondance E. Ansermet - J.-Claude Piguët (1948-1969)*, par Claude Tappolet) も出版されているようであるが、こちらも詳細は確認できていない。

その他にも、本稿著者が確認した範囲では、ラミュの『書簡集 1900 - 1918』(*Lettres : 1900 - 1918*, Lausanne, 1956) の中には、アンセルメへの書簡が幾つか含まれている (pp. 212 - 213, 239 - 240, 259 - 260, 266 - 268, 270 - 272, 283 - 284, 297 - 298, 323 - 324)。加えて、この書簡集にはアンセルメの文章である「《兵士の物語》の誕生」(*La naissance de « L'Histoire du Soldat »*, pp. 35 - 37) が所収されており、アンセルメとストラヴィンスキ

一やラミュとの関係を考える上での貴重なドキュメントとなっている<sup>34</sup>。ラミュからストラヴィンスキーへの書簡も含まれており、ストラヴィンスキーの創作におけるアンセルメやラミュとの協力関係を捉える上での資料の一つである。

### 第三節 邦訳の状況

アンセルメの著作について完全な邦訳が出ているのは、『音楽についての対話』（遠山一行・寺田由美子[訳]：邦題『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年）のみであり、本邦におけるアンセルメ思想の受容で最も参照されているのはこの著作であると考えられる。しかし、幾つかの著作については、全訳ではない形での翻訳が出版されており、これらは今日あまり知られていないと思われるので、ここで紹介しておく。

まず、アンセルメの主著である『諸基礎』は第二部第二章の1、2の全訳と3の途中までの訳が1964年から1965年にかけての『音楽芸術』第22巻10号から第23巻10号に掲載された<sup>35</sup>。訳者は、『音楽についての対話』と同じ遠山一行である。これはストラヴィンスキー、シェーンベルク、ウェーベルン、ベルクを論じている箇所である。

続いて、「音楽体験と今日の世界」の翻訳が吉田秀和の評論集『主題と変奏』（創元社、1953年）に所収されている。これは、「Ⅷ 現代音楽の諸問題」（pp. 157 - 217）と題された箇所の一部として掲載されており、アンセルメの講演が行われたジュネーヴ国際会議についての吉田による紹介（pp. 157 - 167）に続いて、「音楽体験と今日の世界」の翻訳が載せられ（pp. 167 - 212）。加えて、その後、会議後の討論におけるシュレゼールとロラン・マニユエルによる批判とそれらに対するアンセルメの反論が紹介されている。

ただし、この翻訳は訳者が「この論文の翻訳権をもっていないので残念ながら、全文をそのまま紹介できない」（pp. 166 - 167）とのことであり、あくまで要旨という形だとされている。また、このような事情からか、吉田秀和全集版の「主題と変奏」や、中公文庫の版では、「現代音楽の諸問題」は採録されておらず、本稿著者の確認した範囲では、創元社版でのみ読むことができる。また、この「現代音楽の諸問題」は1950年の『フィルハーモニー』に掲載されたものとのことである。

次に、『音楽論集』に収録されていた「ストラヴィンスキーの場合」は「現代音楽の危機—ストラヴィンスキーの場合—」（遠山一行[訳]、高階秀爾[編]『美の冒険：現代人の思想6』平凡社、1968年、pp. 290 - 306）という題で翻訳されている。これは *Recorded Sound* 誌に掲載された版を基にした翻訳とのことである。

その他、北沢によれば『日本読書新聞』（1964年6月29日号）に「アンセルメは語る」の題でアンセルメのインタビューが掲載され、そこで音楽美学的な問題についても語られ

<sup>34</sup> また、本稿の主題からは外れるが、この書簡集にはラミュからストラヴィンスキーへの書簡も含まれており、ストラヴィンスキーの創作におけるアンセルメやラミュとの協力関係を捉える上での資料の一つとしても位置付けられる。

<sup>35</sup> この連載は第23巻12号まで続くが、最後の回は翻訳ではなくて、訳者による捕捉のみである。



たようであるが<sup>36</sup>、本稿では現物の確認ができていない。

## 第二章『諸基礎』の概観と主要な先行研究

本章では、アンセルメの思想を大まかにつかむために、まず『諸基礎』の全体を概観し、続いて、アンセルメの現象学理解と『諸基礎』の中心概念である「対数」と「カダンス」について簡単に確認する。

### 第一節 『諸基礎』の概観

本節では、『諸基礎』の概要を把握することにする。ただし、既に述べたように『諸基礎』には複数の版が存在するが、ここでは全体の概観という目的としては各版の比較をする必要はないであろうし、また、煩雑さを避けるためにも、初版のみを参照する。

『諸基礎』初版は二部構成の第一巻と、第一巻への長い注からなる第二巻という構成である。まず、この第一巻第一部「聴覚的意識と音楽的意識」(La conscience auditive et la conscience musicale)を見てみると、第一章は「聴覚的意識」(La conscience auditive, pp. 25 - 73)、第二章は「聴覚的地平」(L'horizon auditif, pp. 75 - 138)、第三章は「諸音の中への音楽の出現」(L'apparition de la musique dans les sons, pp. 139 - 236)、第四章「行為における音楽的意識」(La conscience musicale en acte, pp. 237 - 365)となっている。つまり、ここでは、最初に音を捉える人間の聴覚が問題とされ、その聴覚において開かれる地平の中に音楽が現れるという順序で記述が展開されている。そして、第一章が聴覚的「意識」を扱い、第四章が音楽的「意識」を扱っていることから判るように、一連の記述は著作のタイトルに掲げられた「人間の意識」における問題として捉えられているのである。

続いて第二部は、「経験的方法における音楽の歴史的創造」(La création historique de la musique dans l'empirisme)と題されており、第一章が「我々の時代の始まりに至るまでの歴史」(L'histoire jusqu'au seuil de notre époque, pp. 369 - 469)、第二章が「現代音楽」(La musique contemporaine, pp. 471 - 582)となっている。ここで、アンセルメは、まず第一章で音楽を三期に分けて論述する。この歴史区分については『音楽についての対話』で要約的に語られているが、それによれば、第一期は原始人たちの音楽であり、第二期は中国、インド、ペルシャ、アラビア、ギリシャ、エジプトなどの古代文明の音楽であり、第三期はキリスト教世界の音楽(=西洋音楽)である<sup>37</sup>。続いて第二章で、アンセルメは、この第三期につらなる現代の「歴史的状況」(La situation historique, pp. 471 - 481)を述べた上で、ストラヴィンスキー(pp. 481 - 506)、シェーンベルクとその楽派(pp. 506 - 556)<sup>38</sup>を個別に論じ、最後に「時代の概観」(Vue générale de l'époque, pp. 557 - 582)でしめ

<sup>36</sup> 北沢「エルネスト・アンセルメと現代」、p. 50 及び、寺田由美子「アンセルメの音楽思想」、クロード・ピゲ『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年、p. 236、247、参照。

<sup>37</sup> Cf. Ansermet et Pigué, *Entretiens sur la musique*, 1963, pp. 109 - 114. 邦訳、pp. 130 - 136、参照。

<sup>38</sup> シェーンベルク楽派としては特にウェーベルン(pp. 538 - 540)とベルク(pp. 540 - 552)が個別に論

くくっている。

## 第二節 アンセルメの音楽美学の主要観点

アンセルメの音楽美学の基本的な立場は現象学であり、また、アンセルメの音楽美学についてしばしば言及されるのは「対数」と「カダンス」という二つの概念である。本節では、この三つの観点の概要を順次示す。

### (1) 現象学

まず、アンセルメの主要な思想的背景は、彼自身が『諸基礎』等で述べ<sup>39</sup>、また先行研究においても指摘されているように<sup>40</sup>、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905 - 1980) を経由したフッサール現象学とされている。アンセルメ曰く、現象学的と言われる思考方法では、「フッサールの言うように「括弧の中に入れること」<sup>41</sup>によって、「そこ[現れ]から現象の発生へと、それ[現象]を知覚して性格づけている意識の中で、立ち戻らなくてはならない」<sup>42</sup>。つまり、アンセルメは、「音楽的意識は[中略]自らによってまた自らに対して音響的世界[un monde sonore]を構成した」(FM[1989] 347)<sup>43</sup>と考え、この構成が如何になされるのかを問題としている。

詳述すると、「何ものかについての意識」<sup>44</sup>は、同時に「自己 (についての) 意識 [= 非反省的意識]」<sup>45</sup>であるというサルトルの主張に基づき、アンセルメは或る音に向けられた意識とその意識自体についての「非反省的意識 (la conscience irréfléchie)」との関係から、現象としての音楽の発生を捉えようとする (cf. FM I 33 [317])。すなわち、「ノエシスは[中略]前反省的活動[l'activité préreflexive]であり、これによってノエマは前もって規定されている」(FM I 28 [314])<sup>46</sup>とし、ノエシスによる「[ノエマ]、[すなわち]意識が知覚によって自らに与える「イメージ」」(FM I 28 [314])の規定が如何になされるかを問うのである。

---

じられている。

<sup>39</sup> Cf., FM I 7 [291], Ansermet et Piguët, *Entretiens sur la musique*, Neuchâtel, 1963, pp. 105 - 106. 邦訳『アンセルメとの対話』、pp. 124 - 125。

<sup>40</sup> Cf., Eric Emery, *Temps et musique*, Lausanne, 1975, pp. 469 - 470, Piguët, *Ernest Ansermet et les fondements de la musique*, Lausanne, 1964, p. 59, et, *La pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983, pp. 17-18.

<sup>41</sup> Ansermet et Piguët, *op. cit.*, pp. 153 - 154. 邦訳、p. 186。訳文は邦訳に依りつつ、適宜訳語等を改めた。

<sup>42</sup> Ansermet et Piguët, *op. cit.*, p. 153. 邦訳、p. 186。

<sup>43</sup> この箇所は初版では「音楽的意識は自らによってまた自らに対して調的世界を構成した」(FM I 71)となっている。しかし、アンセルメにとっては、音響世界は必然的に調性を持つものであり、二つの版の記述の間に矛盾はない。

<sup>44</sup> J.-P. Sartre, *L'être et le néant : Essai d'ontologie phénoménologique*, Paris, 1976, p. 20. 邦訳『存在と無』第一分冊、人文書院、1956年、p. 30。『存在と無』からの引用に際しては邦訳に依りつつ適宜言語を補う等改めた。

<sup>45</sup> Sartre, *op. cit.*, p. 20. 邦訳、p. 30。

<sup>46</sup> 本稿の文脈では「非反省的」と「前反省的」そして後に出てくる「非措定的」はほぼ同じ事柄を指す。

## (2) 対数

ピゲが「如何なる教えも、[中略]音楽的対数[logarithmes musicaux]のそれほどには、アンセルメを熱中させはしなかった」<sup>47</sup>と述べているように、アンセルメは『諸基礎』の中で多くの頁を割いて音楽と「対数」の関係について記述している。その詳細は本発表の問題と直接に関わるものではないが、ここでその基本となる考えを紹介しておく。

まず、アンセルメによれば人は一般に次のように考えている。

人が認めるところでは、5度を知覚するということは、 $\frac{3}{2}$  という振動数の比を知覚するということであり、4度は $\frac{4}{3}$ であり、また、人が認めるところでは、人が5度と4度を続けて聞く場合には、人は、最初の二つの比の積[le produit]を知ること、オクターヴ[すなわち] $\frac{2}{1}$ を知覚したのである： $\frac{3}{2} \times \frac{4}{3} = \frac{2}{1}$ 。(FM I 9 [295])

ここでまず言われているのは、音響学的な音程関係の説明の仕方である。ここでの要点は、音響学的な説明の場合、5度の $\frac{3}{2}$ と4度の $\frac{4}{3}$ という二つの振動数の比の両者を掛け合わせた積によって、最初の音のオクターヴ上の音、すなわち2倍( $\frac{2}{1}$ 倍)の振動数が得られると人々が考えているということである。

しかし、このような音響学的な説明に対して、アンセルメは次のように反論し、「対数」<sup>48</sup>的な考え方の必要性を主張している。

しかし、聴覚的印象では、5度と4度は相互に足し合されており<sup>49</sup>、また、オクターヴはそれら[5度と4度]の和[la somme]である。この現象が説明され得るのは、人が知覚するのは振動数の諸々の比ではなくて、それら[諸々の比]の諸対数[logarithmes]だということを知る場合だけであり、[このときに]二つの数の積は実際、それらの対数の和によって示されるのである。(FM I 9 [295])

つまり、アンセルメは、5度と4度の継起によってオクターヴが知覚されるのは「積」によってではなく「和」によってであると反論し、その際に「対数」的な考え方が必要だとしている。アンセルメは対数による計算では乗法(積)ではなくて加法(和)によって二つの音程の関係を考えることができることから<sup>50</sup>、聴覚は対数的だと考えているのである<sup>51</sup>。そして、アンセルメは、このような聴覚の在り方を音楽聴取に応用しようとするのである。

その上で、アンセルメは「私が発見した対数的体系は、もし音楽の法則が存在しなければ

<sup>47</sup> Piguet, *La pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983, p. 43.

<sup>48</sup> 対数とは、 $N=ab$ のときその $b$ である( $b=\log_a N$ )。

<sup>49</sup> 引用文中の傍点は原文のイタリック体表記を示している。

<sup>50</sup>  $\log \frac{3}{2} + \log \frac{4}{3} = \log 3 \cdot \log 2 + \log 4 \cdot \log 3 = \log 4 \cdot \log 2 = \log \frac{4}{2} = \log 2$

<sup>51</sup> この点については、Piguet, *Ernest Ansermet et les fondements de la musique*, 1964, p. 62 ff. 及び Court, *Le musical*, 1976, p. 60 も参照。

ばならないとすれば、調的法則——調性——こそが、音響構造に意味を与えることのできる唯一の法則であると認めている」<sup>52</sup>と主張し、それ故、このような体系から外れている十二音主義やセリー音楽は、人間の聴覚的な特性に反するとして批判的な立場をとることになる。

このようなアンセルメの主張について、ピゲは「アンセルメの科学的な諸々の主張を嘲笑うのは非常に容易いし、また、科学の側の人間たちは、そうすることを自らに禁じなかった」<sup>53</sup>と述べているが、実際「対数」を用いたアンセルメの諸々の理論は、既に50年以上経過したものであり、科学的な観点からはもはやアクチュアリティを持つものではないだろう。一方で、音楽的な観点からも、アンセルメの立場は一見非常に旧弊に思える。というのも、上に述べたように、アンセルメの主張は明確に調性擁護的であり、無調の音楽を排除しているからである。

しかし、ピゲが「アンセルメにとって最も重要なテーゼの一つは、音楽的意識が諸対数からなる体系によって諸音と結びついているということだ」<sup>54</sup>としているように、アンセルメにおいては、あくまでも「音楽的意識」との関係において対数が問題となっている。つまり、「積」ではなくて「和」によって音程を捉えるというのは、我々の意識における音程の受容の仕方の問題であり、この意識と音との関係を考える上で対数という概念が導入されているのである<sup>55</sup>。従って、美学的な問題としてアンセルメの理論を論じるのであれば、意識の現象の問題を出発点としなくてはならない。

### (3) カダンス

では、もう一つの中心的な用語であるカダンスとは何か。まず、カダンスについて、アンセルメは論文「リズムの諸構造」(EM135 - 149[196 - 208])において次のように述べている。

リズム的カダンスについて語ることで、私は、カダンスという語をある領域へと適用しているのだが、そこでは、それ[カダンスという語]を用いる習慣はない。例えば、ドイツ語では、人は決してリズム的カダンスについて語ることはない[中略]。人がカダンスについて語るのは、ドイツ語では、トニック - ドミナント - トニック或いはトニック - サブドミナント - トニックという和声的な運動に関する言葉においてのみである[中略]; 或いはまた、人は、ドイツ語では、兵士たちの歩調のカダンスについて語るが、このカダンスが[手足の]上げと下げの結果であるということを見ていない。

(EM140[200])

<sup>52</sup> Ansermet et Pigué, *op. cit.*, 1963, p. 57. 邦訳、p. 62。

<sup>53</sup> Pigué, *La pensée d'Ernest Ansermet*, 1983, p. 11.

<sup>54</sup> Pigué, *Ernest Ansermet et les fondements de la musique*, Lausanne, 1964, p. 62.

<sup>55</sup> Cf., Raymond Court, *Le musical : essai sur les fondements anthropologiques de l'art*, Paris, 1976, p. 61.

このように、カダンスという言葉は一般に和声に関わる用語として使われるのに対し、アンセルメはこの言葉をリズムの領域へと適用している。

また、リズム的カダンスの内実については、ここで、兵士の手足の「上げ (le levé)」と「下げ (le posé)」が言及されている点に注目すべきである。この引用の直前の段落で、アンセルメがマティス・リュシー (Mathis Lussy, 1828 - 1910) に言及しながら、「我々の呼吸のカダンス [notre cadence respiratoire]」(EM140[200]) は「上拍 - 下拍、アルシス - テシス」という形式 [la forme levé-posé, *arsis-thésis*] (EM140[200]) を取るとしていることから、この「上げと下げ」は「上拍 - 下拍、アルシス - テシス」というリズム構造上の概念を含意している。従って、アンセルメの言う「リズム的カダンス」とは、「上拍」(アルシス) と「下拍」(テシス) の結合によって成立しているものだということが判る。つまり、アンセルメは「全てのリズム的カダンス (外転 - 内転、[筋肉の]収縮 - 弛緩、[心臓の]収縮 - 拡張、吸気 - 呼気、上拍 - 下拍、振動の運動) は、諸現象の内への、関係のデュナミスムの出現だ」(FM II 8 [870]) と考えているのである。すなわち、リズム的カダンスとは対立的な性格を持つ二つの部分からなる力動的な関係なのである。

そして、アンセルメは更に次のように主張する。

和声的カダンスも、このカダンスが、同時にリズム的カダンス、[すなわち]時間性のカダンスでなかったなら、在りはしない。要するに、音楽においては、同時にリズム的カダンスでないような調的カダンスも存在しないし、同時に調的カダンスでないようなリズム的カダンスも存在しないのである。

(EM140[200])

つまり、和声的な意味でのカダンスも実は同時にリズム的カダンスであり、その逆もそうだとすることである。従って、カダンスという構造は和声の様相とリズムの様相とを横断する音楽の普遍的な枠組みだとアンセルメは考えているのだ。すなわち、「カダンス」は、「[中略]、現存 - 意識 [l'existence-conscience]<sup>56</sup>において、諸原理の原理、全ての諸基礎の基礎である」(FM II 197 [1015]) のであり、カダンスは意識と音楽の関係を問題とする上で最も基礎的なものだとアンセルメは捉えているのである。

以上がアンセルメの音楽美学の概観である。ここで理解されるように、アンセルメがこのような「対数」や「カダンス」を語る際、常に意識における音楽の成立の有り方が問わ

<sup>56</sup> ここでの *existence* は実存思想的な意味合いではなく、世界の中に現実に存在しているといった意味が強いので、誤解を避ける為に、「実存」ではなくて「現存」という訳語を当てた。また、同じ理由から *existentiel* も「実存的」ではなくて「現存的」、*exister* も「実存する/させる」ではなくて「現存する/させる」という訳語を用いている。

また、「現存 - 意識」という言葉についてであるが、松浪が、サルトルの『存在と無』におけるこのようなトレ・デュニオンで二語をつなぐような表現について述べているのと同様に、「-」を *comme* と置き換えて「意識としての現存」と解するのが適切だと思われる (cf. 松浪信三郎「あとがき」、『存在と無』(第二分冊) 人文書院、1958、pp. 469 - 470)。

れている。よって、本稿で演奏の問題を考える場合もこのような意識現象の問題として考えねばならない。

なお、ここで、リズム的カダンスとして呼吸や脈拍といった身体的なものを挙げている点は注目に値する。というのも、本稿第三章において考察するように、アンセルメがカダンスを重視する理論的背景には身体の位置づけが深く関わるからである。

### 第三節 主要な先行研究

学術論文においてアンセルメの名前が挙がるのはストラヴィンスキーとの関係で言及される場合が多く、アンセルメの思想自体についての先行研究は少ない。本稿では、特に注目すべきものの名前を挙げておく。

まず、最も基礎的な文献と言えるのが、ピゲによる二冊の著作『エルネスト・アンセルメと音楽の諸基礎』(*Ernest Ansermet et les fondements de la musique*, Lausanne, 1964) や『エルネスト・アンセルメの思想』(*La pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983)<sup>57</sup> である。これらにおいては、アンセルメの思想が概説的に述べられており、アンセルメの思想全体を捉える上で有用である。また、ピゲ自身がアンセルメと親交があり、『諸基礎』の出版そのものにまで深くかかわっていたことを考えるなら、これらの著作における解釈には一定の信頼性があると言える。ただし、この両者の近さから、ピゲによるアンセルメへの高い評価には若干の留保をおいて読む必要があるだろう。

次に、まとまった形でアンセルメに言及しているのは、エリック・エムリーの『時間と音楽』(*Temps et musique*, Lausanne, 1975) である。この中でエムリーは、「E.アンセルメ：人間の意識における音楽の諸基礎」(pp. 469 - 478) という節を設けて、アンセルメを個別に取り上げ、その思想を紹介している。エムリーの記述もピゲと同様概説的な面が強いが、書名にあるように時間と音楽という問題圏の中でアンセルメの著作を取り上げている点は特徴的であるといえる。また、エムリーはこの著作の第二部第八章「音楽の演奏家と教育者の証言」(*Le témoignage des interprètes et des pédagogues de la musique*, pp. 518 - 558) の中の「オーケストラの指揮者の身振り」(*Le geste du chef d'orchestre*, pp. 43 - 551) において、アンセルメの論考「オーケストラの指揮者の身振り」に言及している。

その他のまとまった記述としては、レイモン・クールの論文「リズム、テンポ、拍子」(*« Rythme, tempo, mesure », Revue d'esthétique*, 2, 1974, pp. 143-159) と『音楽的なるもの』(*Le musical*, Paris, 1976) を挙げることができる。前者の論文のタイトルからも解るように、クールはリズム論の文脈でアンセルメを取り上げ、高く評価している。加えて、『音楽的なるもの』においては、対数の議論 (pp. 60 - 62) や音楽作品の存在論に関する議論 (p. 142) にも言及している。

<sup>57</sup> この1983年の著作は、ヌマ＝F. テタ (Numa-F. Tétaz, 1926 - ) の『解釈者、エルネスト・アンセルメ』(*Ernest Ansermet, interprète*, Lausanne, 1983) とアン・アンセルメ (Anne Ansermet) の『アンセルメ、わが父』(*Ernest Ansermet, mon père*, Lausanne, 1983) と三冊で一つのシリーズとして出版された。

また、ランゲンドルフの『エルネスト・アンセルメ：あるいは真正さへの情熱』（*Ernest Ansermet ou la passion de l'authenticité*, Genève, 1997）はアンセルメの思想を中心とした著作ではなくて、アンセルメのモノグラフィーであるが、『諸基礎』についても比較的多くのページを割いて記述している（pp. 117 - 151）。また、この箇所では1989年の『著作集』の出版や、『諸基礎』イタリア語版（1996年）等にも触れられており、『諸基礎』の出版状況を知るうえで参照することができる。

これらに加えて、書評としては、以下のものがかなり詳しく『諸基礎』を取り上げている。

- ・ Philippot, Michel, tr. by Edward Messinger, "Ansermet's Phenomenological Metamorphoses," *Perspectives of New Music*, 1946, pp. 129 - 140.
- ・ Bernhard Billeter, „ERNEST ANSERMET: DIE GRUNDLAGEN DER MUSIK IM MENSCHLICHEN BEWUSSTSEIN: Zu deutschen Ausgabe der Musikphilosophie Ernest Ansermets,“ in *Österreichische Musikzeitschrift*, 21. Jahrgang, Heft 7, 1966, S. 326 - 338.

後者はドイツ語版に対する書評であるが、「アンセルメは、彼[アンセルメ]がそれ[フッサール現象学]を全ての従来の学問や哲学に対立させるとき、「フッサールの現象学」を無理やり自分に従わせているように思える」（S. 337）とするなど、アンセルメの現象学理解に批判的なコメントがなされており、アンセルメの現象学理解を考える上で参考となる<sup>58</sup>。

#### 第四節 日本における受容

アンセルメについての文章はレコードやCDの解説、批評等、膨大なものがあると思われるが、アンセルメの思想を扱った文章はいまだ少ない。しかし、幾つかかなり詳細な紹介が行われているので、ここで挙げておく。

- ・ 遠山一行「アンセルメの音楽論」『思想』、No. 482、1964年、pp. 112 - 116
- ・ 池田逸子、寺田兼文、松崎由美子「二十世紀の音楽思想」『思想』、No. 532、1968年、pp. 23 - 38
- ・ 北沢方邦「エルネスト・アンセルメと現代」『みすず』第63号、1964年、pp. 41 - 50

これらの内、最初の「アンセルメの音楽論」の著者である音楽評論家の遠山一行は、『音楽についての対話』（邦訳『アンセルメとの対話』）と「ストラヴィンスキーの場合」（邦題「現代音楽の危機」）の翻訳や『音楽芸術』に連載された『諸基礎』第二部第二章の部分訳（第

---

<sup>58</sup> ただし、アンセルメはフッサールを直接参照してもいるが、むしろサルトルを通じて現象学を摂取したとされている。従って、サルトルの現象学自体がフッサールとの差異を含んでいるため、アンセルメの現

一節、第二節の全訳と第三節の途中までの訳)によって、アンセルメの思想を紹介した人物である。遠山は『音楽芸術』における翻訳連載の最初の回と最後の二回でもアンセルメの思想についての紹介を行っており<sup>59</sup>、日本におけるアンセルメの思想の紹介にあたって最も大きな足跡を残した人物と言える。『音楽芸術』における翻訳もストラヴィンスキーをはじめとした現代音楽を扱った箇所であったが、この「アンセルメの音楽論」もストラヴィンスキー論に焦点をあてており、遠山による紹介の重点は全般的にアンセルメによる現代音楽論にあると言える。

続く北沢方邦のものはアンセルメの思想における三段階の音楽史区分について解説しているが、対象としている部分が歴史哲学的な内容であることもあり、多分に社会思想的な視点の含まれた論述となっている。例えば、この点は「個人主義者であった西洋の集合的意識が、ある日「社会的」意識にめざめるとき、そのときこそコミュニストは音楽の領域におけるドデカフォニストのように、道はずれた時代遅れの姿として時代にとりのこされるのである」(p. 49)といった文章に顕著である。なお、北沢は先述のように『朝日ジャーナル』でも『音楽についての対話』の要約を行っている。

三番目の「二十世紀の音楽思想」は20世紀における動向として、作曲家ではシェーンベルク、ストラヴィンスキー、ケージ、ブレイズ、シュトックハウゼンを、思想家(音楽美学者)ではジゼル・ブルレ、既に本稿でも言及したシュレゼール、ポーランドのソフィア・リッサとロマン・インガルデン、アドルノといった人々とならんでアンセルメの思想を紹介している。なお、『思想』のこの号は「音楽の思想」の特集号であり、先述の遠山や音楽学者の船山隆も各々の論考でアンセルメに若干の言及をしている<sup>60</sup>。

最後に、北沢方邦による「音楽の本質を考える」(『朝日ジャーナル』vol. 6 no. 23, 1964年, pp. 102 - 106)がある。アンセルメ著の形で掲載されている文章ではあるが、これは訳者とされている北沢によれば「アンセルメ著『音楽についての対話』の要旨を、ご本人の許諾をえて自由に紹介翻訳したもの」(pp. 106)とのことである。従って、アンセルメの著作というよりは、ほぼ北沢による文章と捉えてよいように思われる。

ここで気づくのは、これらの紹介が全て1960年代のものであるということである。アンセルメの死の翌年の1970年に出版された『アンセルメとの対話』以降、アンセルメの思想についてのまとまった記述は見られなくなる。すなわち、日本においては60年代にアンセルメの思想への関心が高まったが、それ以降はあまり注目されなくなったということである。

---

象学がフッサールに忠実でないように見えるのは当然のことである。

<sup>59</sup> 遠山一行「はじめに一訳者から—」、「アンセルメ「現代音楽について」」『音楽芸術』第22巻10号、1964年、pp. 36 - 37、「アンセルメ「現代音楽について」補遺(一)」、エルネスト・アンセルメ「アンセルメ「現代音楽について」」『音楽芸術』第23巻10号、pp. 60 - 62、「補遺(2)」、「アンセルメ「現代音楽について」」『音楽芸術』第23巻12号、pp. 59 - 61。

<sup>60</sup> 遠山「現代音楽試論」、『思想』No. 532、pp. 1 - 11 (特に p. 5)、船山隆「前衛音楽の思想」、『思想』同号、pp. 12 - 22 (特に、p. 13、pp. 20 - 21)。



### 第三章 アンセルメの思想についての諸問題

上記がアンセルメの著作及び思想の概観である。本章では、このようなアンセルメの思想について、どのような論点が現段階で想定されうるかを提示する。ただし、以下でも若干言及するが、個々の問題は相互に結びついており、完全に個別に取り挙げて論じることが不可能である。従って、以下で示すのは、アンセルメの音楽美学に含まれる幾つかの問題の方向性として理解しなくてはならない。

#### 1、音楽と数学の関係

第二章で述べたように、アンセルメの音楽論においては対数という数学上の概念が重要な役割を担っている。このような理論は、アンセルメによれば、ヴェーバー-フェヒナーの法則といった精神物理学の理論を参照したものであり (cf. FM I [296])、自然科学的あるいは心理学的な理論を着想源としている。従って、科学から音楽理論の影響という文脈の中で、アンセルメの思想をどのように位置づけることが出来るのかという点が問題となるだろう。

また、一方で音楽と数学は古代ギリシャ以来深い関係にあった。このことを考えるなら、音楽と数学の関係の長い歴史の中でアンセルメの思想をどのように位置づけることが出来るのかという点も問題となるだろう。

#### 2、身体

本稿著者が他誌の論文で指摘したように<sup>61</sup>、アンセルメの美学においては身体 (*le corps*) が大きな役割を担っている。この身体的重要性については、エムリーが、アンセルメの議論においては「それ[音楽的時間]は、その起源を身体的時間性 [*la temporalité corporelle*] から引き出している」<sup>62</sup>のであり、「それ[音楽]は[中略]心理的時間性と身体的時間性の間の一致を確保している」<sup>63</sup>と指摘していることから判るように、時間の問題に密接に関わるものである。

これは、アンセルメがサルトルに依拠しつつ、「意識は[中略]身体から分離され得ないが、しかし、それは身体ではない」 (FM II 16 [877]) として、身体と意識とが密接に関係していると捉えている点に根拠があると思われる。この点について、本稿著者は、サルトルが「身体は[中略]自己 (についての) 非措定的意識の諸構造に属する」<sup>64</sup>としていたのと同様、アンセルメも身体が何らかの形で非措定的意識に関わるものと考えていたからだと指摘した<sup>65</sup>。しかし、身体と意識、或いは時間といったものの関係についてアンセルメがどのように捉えていたのかという点については、より一層、詳細な検討が必要である。

<sup>61</sup> 拙論「エルネスト・アンセルメの音楽美学における身体と解釈——現象学的身体論としてのアンセルメの音楽美学——」、『音楽学』第63巻1号、2017年、pp. 26-30、参照。

<sup>62</sup> Emery, *op. cit.*, p. 475.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 476.

<sup>64</sup> J. P. Sartre, *L'être et le néant : Essai d'ontologie phénoménologique*, Paris, 1976, p. 369.

<sup>65</sup> 拙論、前掲、p. 27 参照。

### 3、音楽的時間

2で述べたように、アンセルメにおいては身体が時間の問題と密接に結びつくものと考えられるが、これに関連して、音楽美学において問題となるのは「音楽的時間」(le temps musical)の問題である。「音楽的時間」は、20世紀の音楽美学における主要な問題の一つであり、ジゼル・ブルレの議論が特に有名である。既に述べたように、アンセルメは「音楽的時間」と題した論考を残しているが、『諸基礎』の注でも二カ所で「音楽的時間」という見出しをつけて論述している (cf. FM II 11 - 12[873 - 876], 137 - 138[973 - 975])。従って、アンセルメの音楽美学においても、「音楽的時間」という主題は、一定の重要性を持っていることが解るのであり、それ故、エムリーも時間と音楽を論じる際にアンセルメに言及しているのである<sup>66</sup>。

そして、アンセルメの音楽的時間論の特徴は何かと考えると、それが、2で述べたような身体の役割のだと言えるのである。ブルレなどの音楽的時間論において基本的に身体が大きく問題となることはなかったことを考えるなら、この点においてアンセルメの議論は音楽的時間論という問題圏に新たな視点を付け加える可能性が予想される<sup>67</sup>。

### 4、倫理的側面

アンセルメの音楽美学のもう一つの特徴を挙げるとすれば、それは音楽を論じる際にきわめて倫理的な議論がそこに含まれてくるということである。例えば、『諸基礎』初版第一部「聴覚的意識と音楽的意識」の第三章「諸音の中への音楽の出現」の中で、「A. 音楽の想像行為」(A. L'acte imageant musical, pp. 139 - 173)に続いて「B. 神の現象学」(B. La phénoménologie de Dieu, pp. 174 - 236)が論じられ、この「神の現象学」には「3. 神の経験」(3. L'expérience de Dieu, pp. 189 - 197)と「倫理的な生」(4. La vie éthique, 197 - 221)といった項目が含まれている点などに顕著である。

カントに代表される近代の美学が美と道徳(倫理)を厳密に分けてきたことを考えるなら、これは特異なことである。また、アンセルメに影響を与えたサルトルが無神論的実存主義の代表格とされていることを考えると、ここにはサルトルの実存哲学の単なる応用を越えたアンセルメの思想の特徴を見て取る糸口があると言えるだろう。

### 5、感情

ハンスリック以来の自律的音楽美学においては、感情は音楽美学の領域から排除されてきたといってよい。そのような美学的伝統からすると、アンセルメが「音楽は感情の出来

<sup>66</sup> Emery, *op. cit.*, pp. 469 - 478, etc.

<sup>67</sup> なお、アンセルメにおける音楽的時間の問題については、本稿著者が学会発表にて既に若干の考察を加えている(拙論「エルネスト・アンセルメにおける「音楽的時間」論」[第六十八回美学会全国大会発表要旨]、『美学』第68巻2号、2017年、p. 146、参照)。この内容については、稿を改めて詳述したい。

また、ピゲも *Philosophie et musique* (Chêne-Bourg, 1996) の中の第六章「ポリフォニー、和声そしてルネサンス」の「6.6. 音楽的時間」(6.6. Le temps musical, pp. 101 - 106)において、ごくわずかながらアンセルメに言及している。

事である[*événement de sentiment*]<sup>68</sup>と主張しているのは非常に奇異なことに思える。ただし、「音楽経験の中で生きられた感情が形を取るのは、諸々の楽音の現前においてのみである」<sup>69</sup>とされており、ここで言われているのは、あくまで音楽に内在的な感情である。しかし、それでもやはり感情に属する何かの問題とされているのは確かなのであり、ここでアンセルメは、ハンスリックによって音楽から排除された感情を再び音楽の中に取り入れようとしていると言えるだろう。従って、音楽美学史の中でのアンセルメの独自性を考える手掛かりの一つがここにあると言える。

### おわりに

本稿では、アンセルメの著作を可能な限り広範に紹介し、その全体を示すことを試みた。本稿の記述から、アンセルメの著述がかなり多岐にわたるということは理解されるであろうが、それらのより詳細な研究や、音楽美学における位置づけはまだ十分になされているとは言い難い。本稿では、第三章で幾つか問いの方向を示したが、このような方向を考慮しつつ、アンセルメの諸論考が『諸基礎』の記述との連関の中で捉えられ、アンセルメの思想全体の理解に資することが今後期待される。

### 参考文献

※参考文献については、本稿著者が現物あるいはコピーを確認できたもののみ掲載した。従って、未確認のものについては、本文中で言及したものであっても一覧に載せていない。

アンセルメの著作

単著

- ・ *L'expérience musicale et le monde d'aujourd'hui*, Neuchâtel, 1948.
- ・ *Les fondements de la musique dans la conscience humaine*, Neuchâtel, 1961.
- ・ *Die Grundlagen der Musik im menschlichen Bewusstsein*, München, 1965.
- ・ *Les fondements de la musique dans la conscience humaine*, nouvelle édition, Neuchâtel, 1967.
- ・ *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989.

---

<sup>68</sup> Ansermet, « Le temps musical », dans *Micromégas VI : le temps et la musique*, [Zurich ?], 1970, pp. 6.65.

<sup>69</sup> *Ibid.*

以下は初版に基づいた第二部第二章の1、2、及び3の一部の翻訳である。

- ・ 遠山一行 (訳) 「アンセルメ 「現代音楽について」 1 : 1 歴史的状況」『音楽芸術』  
第22巻10号、1964年、pp. 36 - 39
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 2 : 1 歴史的状況 (続)」『音楽芸術』  
第22巻11号、1964年、pp. 52 - 55
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 3 : 1 歴史的状況 (続)、  
II ストラヴィンスキー」『音楽芸術』第22巻12号、1964年、pp. 38 - 43
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 4 : 2 ストラヴィンスキー (続)」  
『音楽芸術』第22巻13号、1964年、pp. 59 - 63
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 5 : 2 ストラヴィンスキー (続)」  
『音楽芸術』第23巻1号、1964年、pp. 48 - 51
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 6 : 2 ストラヴィンスキー (完)」  
『音楽芸術』第23巻第2号、1965年、pp. 46 - 49
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 7 : 3 シェーンベルクとその弟子たち」  
『音楽芸術』第23巻第3号、1965年、pp. 28 - 31
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 8 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (2)」  
『音楽芸術』第23巻第4号、1965年、pp. 32 - 36
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 9 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (3)」  
『音楽芸術』第23巻第5号、1965年、pp. 40 - 44
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 10 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (4)」  
『音楽芸術』第23巻第7号、1965年、pp. 46 - 50
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 11 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (5)」  
『音楽芸術』第23巻第8号、1965年、pp. 38 - 41
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 12 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (6)」  
『音楽芸術』第23巻第9号、1965年、pp. 42 - 47
- ・ ——— 「アンセルメ 「現代音楽について」 13 : 3 シェーンベルクとその弟子たち (7)」  
『音楽芸術』第23巻第10号、1965年、pp. 58 - 60
- ・ *Écrits sur la musique*, Neuchâtel, 1971.  
(邦訳：遠山一行[訳]「現代音楽の危機」(ただし、『音楽論集』からではなく、*Recorded Sound* 誌に掲載されたものからの訳)、高階秀爾[編]『美の冒険：現代人の思想6』平凡社、1968年、pp. 290 - 306)

論文/記事等

- ・ Ansermet et l'autres. *Débat sur l'art contemporain*, Neuchâtel, 1949.  
(邦訳：吉田秀和[訳]「VIII 現代音楽の諸問題」(「音楽体験と今日の世界」の翻訳)、吉田秀和『主題と変奏』創元社、1953年、pp. 157 - 217)

- Ansermet, Ernest. « L'œuvre d'Igor Stravinsky », *La revue musicale*, deuxième année, n° 9, 1921, pp. 1 - 27.
- ——— « Les structures du rythme », dans *Deuxième congrès international du rythme et de la rythmique*, Genève, [1966], pp. 156 - 166.
- ——— « Le temps musical », dans *Micromégas VI : le temps et la musique*, [Zurich?], 1970, pp. 6.65 - 6.71.

#### ピゲとの対談

- *Entretiens sur la musique*, Neuchâtel, 1963.  
(邦訳：遠山一行、寺田由美子[訳]『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年)

#### アンセルメに関する先行研究

- Ansermet, Anne. *Ernest Ansermet, mon père*, Lausanne, 1983.
- Billeter, Bernhard. „ERNEST ANSERMET: DIE GRUNDLAGEN DER MUSIK IM MENSCHLICHEN BEWUSSTSEIN: Zu deutschen Ausgabe der Musikphilosophie Ernest Ansermets,“ in *Österreichische Musikzeitschrift*, 21. Jahrgang, Heft 7, 1966, S. 326 - 338.
- Calame, Christophe. « Actualité de l'esthétique d'Ansermet », dans Association Ernest Ansermet Lausanne-Genève. 1983. *ERNEST ANSERMET :1883-1969*, Lausanne, Bibliothèque cantonale et universitaire, 1983, pp. 190 - 191.
- Court, Raymond. « Rythme, tempo, mesure, *Revue d'esthétique* », 2, Paris, 1974, pp. 143 - 159.
- ———. *Le musical : essai sur les fondements anthropologiques de l'art*, Paris, 1976.
- Fubini, Enrico. tr. by Michael Hatwell, *A History of Music Aesthetics*, Hampshire & London, 1991.
- Langendorf, Jean-Jacques. *Ernest Ansermet ou la passion de l'authenticité*, Genève, 1997.
- ———. *Euterpe et Athéna : 5 essais sur Ernest Ansermet*, Chêne-Bourg/Genève, 1998.
- ———. « Pourquoi une approche phénoménologique de la musique par Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 273.
- Philippot, Michel. tr. by Edward Messinger, “Ansermet's Phenomenological Metamorphoses,” *Perspectives of New Music*, 1946, pp. 129 - 140.

- ・Piguet, Jean-Claude. « Note et notices bibliographiques », dans Ansermet, *Écrits sur la musique*, Lausanne, 1971, pp.245 - 251.
- ・———. *La pensée d'Ernest Ansermet*, Lausanne, 1983.
- ・———. « A propos des *Fondements de la musique* et de la démarche philosophique d'Ernest Ansermet », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, p. 263 - 272.
- ・———. *Philosophie et musique*, Chêne-Bourg, 1996.
- ・Rapin, Jean-Jacques. « Chronologie », dans *Les fondements de la musique dans la conscience humaine et autres écrits*, Paris, 1989, pp. 77 - 86.
- ・Tétaz, Numa-F. *Ernest Ansermet, interprète*, Lausanne, 1983.
- ・小倉朗『現代音楽を語る』岩波新書、1970年
- ・池田逸子、寺田兼文、松崎由美子「二十世紀の音楽思想」、『思想』No. 532、1968年、pp. 23 - 38
- ・北沢方邦「音楽の本質を考える」、『朝日ジャーナル』vol. 6 no. 23、1964年、pp. 102 - 106  
(エルネスト・アンセルメ[著]、北沢方邦[訳]となっているが本論で述べたように実質的には北沢による要約であるので、アンセルメの著作とはしなかった)
- ・———「エルネスト・アンセルメと現代」、『みすず』第6巻8号(通巻63号)、1964年、pp. 41 - 50
- ・寺田由美子「アンセルメの音楽思想」、クロード・ピゲ『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年、pp. 236 - 247
- ・遠山一行「はじめに一訳者から—」、エルネスト・アンセルメ(遠山一行[訳])「現代音楽について：1 歴史的状況」、『音楽芸術』第22巻10号、1964年、pp. 36 - 37
- ・———「アンセルメ「現代音楽について」補遺(一)」、エルネスト・アンセルメ(遠山一行[訳])「現代音楽について13：3 シェーンベルクとその弟子たち(7)」、『音楽芸術』第23巻10号、1965年、pp. 60 - 62
- ・———「補遺(2)」、「アンセルメ「現代音楽について」」、『音楽芸術』第23巻12号、1965年、pp. 59 - 61
- ・———「現代音楽試論」、『思想』No. 532、1968年、pp. 1 - 11
- ・———「あとがき」、クロード・ピゲ『アンセルメとの対話』みすず書房、1970年、pp. 248 - 250
- ・船木理悠「エルネスト・アンセルメの音楽美学における解釈と身体——現象学的身体論としてのアンセルメの音楽美学——」、『音楽学』第63巻1号、2017年、pp. 18 - 31
- ・———「エルネスト・アンセルメにおける「音楽的時間」論(第六十八回美学会全国大会発表要旨)」、『美学』第68巻2号、2017年、p. 146
- ・船山隆「前衛音楽の思想」、『思想』No. 532、pp. 12 - 22
- ・吉田秀和、「現代音楽の諸問題」、『主題と變奏』創元社、1953年、pp. 157 - 217

ラミュに関するもの

- Ramuz, Charles Ferdinand. *Souvenirs sur Igor Strawinsky*, Lausanne, 1946.  
(邦訳：後藤信幸[訳]『ストラヴィンスキーの思い出』泰流社、1958年)
- ——— (加太宏邦[訳])「ヴァレー地方風土鈔——山の民と自然」『法政大学多摩論集』  
第23巻、2007年、pp. 26 - 99 (訳者による緒言と解説を含む)

その他参考文献

- Piguet, J. - Claude. *Découverte de la musique*, Neuchâtel, 1948.  
(邦訳：J. クロード・ピゲ (佐藤浩[訳])『音楽の発見』音楽之友社、1956年)
- Sartre, Jean-Paul. *L'être et le néant*, Paris : Gallimard, 1948 (*L'être et le néant : Essai d'ontologie phénoménologique*, Paris, 1976). 本稿では1976年版を参照した。  
(邦訳：松浪信三郎[訳]『存在と無』(第一～第三分冊)人文書院、1956 - 1988年)
- Schlœzer, Boris de. *Introduction à J.-S. Bach : essai d'esthétique musicale*, Paris, 1947.
- ———. *Igor Stravinsky*, Paris, 1929 : réédition, Rennes, PUR, 2012.